〔研究ノート〕

「父と子のキャンプ」不参加要因の分析

市　川　　緑

１．は　じ　め　に

山極（1997）は，ゴリラやチンパンジーの生態を研究して父親の起源を探った著作を「父という余分なもの」と題しているが，ヒトにおいて父親はいかなる存在意義を持つものなのか？心理学においては，長らく親子関係はイコール母子関係であり，父子関係には焦点が当てられなかったが，近年父性の喪失が取りざたされるようになり，注目を浴びている。正高（2002）は「マスメディアで報じられるさまざまな青少年の問題は，母子密着型子育ての弊害であり，子どもの社会化には父親の役割が重要である。」と述べている。ここでいう社会化とは，対人関係において攻撃的にならず，かつ引っ込み思案にもならず他人とうまく関係していく能力，世の中や仕事上のルールを身につけて一人前の大人として社会に出て行くことを意味している。

父親の役割については，大きく分けて二つ考えられる。一つは母親を支える役割である。西薗（1984）は「母親は純粋に一人で独立して子どもに立ち向かっているのでなく，夫婦の代表として子どもにかかわっているのである。」と述べているし，滝口（1984）も「夫の理解と協力によって心の安定が得られると，赤ちゃんに没頭してその特徴や独自の信号を読み取ることも，ほどよく holding することも可能になる。」と述べている。このように，母親を支える役割は（直接子どもとかかわるわけではないが）重要な側面であると考えられる。あと一つは，母親との共生関係から分離し，自立していく際に第三者として果たす役割であろう。子どもが母親から分離しようとする際，共生状態のぬくぬくとした居心地のよさと，魅力的な外界への好奇心との間で，葛藤状態に陥ると思われる。その時，母親から離れていく子どもの新しい基地として，あるいは探索行動の対象として父親の役割は大切である。先に述べた，正高のいう社会化へとつながっていくものである。

このように父親の重要性が指摘される一方で，父親の子育て参加はなかなか進んでいない。そこで，父親に積極的に子どもとかかわってもらうにはどうすればよいのか，試験的に父親を対象とした子育て支援のキャンプを計画した。しかし，申し込みが少なく中止せざるを得なくなった。一体どこがニーズに合わなかったのか検証し，次の試みにつなげたいと思い，アンケート調査および，それを補う意味の聞き取り調査を実施した。

２．問　　題

１）父親を対象とした子育て支援

子育て支援については，1989年の1.57ショック以来，仕事を持つ両親のための保育所の整備，自治体や企業による経済的支援，子育てのノウハウを伝える両親学級や育児相談，仲間作りと気軽に相談にも乗ってもらえる子育てサロンや育児サークルなど，さまざまの場所で数多くの取り組みがなされている。しかし，平均帰宅時間が20時49分（スウェーデンでは，17時11分）（内閣府，2005）である一般的な父親にとって，これらの支援は，利用しやすい状況にはないのが現状である。合計特殊出生率がなかなか回復しないことを受けて，最後まで支援が遅れた領域，つまり父親の育児参加という点にやっと注目が集まり始めた。

蛭田（2001）は，父親の子育てについての意識と子育て参加の実態を調査し，72％の父親が休日を家族とともに過ごすと答えている半面，体調に不調を感じている割合が61％にも上り，企業・職場における支援が必要ではないかと提言している。西岡（2004）は，父親の育児行動を規定する要因について調べ，帰宅時間と末子の年齢の２変数が大きく影響することを明らかにした。また，ベネッセ次世代育成研究所（2006）は，乳幼児を持つ父親が使いやすいと思う子育て支援について「フレックスタイムや短時間就業が自由に取れること（54.6％）」「在宅勤務ができること（45.1％）」のように柔軟な働き方を希望する人，「男性の育児休業制度の義務化（46.3％）」「男性の育児休業制度の100％有給化（44.3％）」などの法的制度の整備を希望する人が多かったと報告している。父親の意識は家庭や子育てに向くようになってきたが，その半面仕事との板ばさみで，悩みや肉体的負担も増えていると推測される。

では，具体的にはどのような支援が試みられているのだろうか？兵庫県は，2006年８月に設置した少子対策担当理事と少子局を中心に父親子育てフォーラムなど父親を対象とした事業を推進している。また，埼玉県新座市では，カナダの父親支援プロジェクトを元に，カナダから講師を招いて，父親のための子育て支援プログラムを開発実施し始めた（2006）。前述のベネッセ次世代研究所は，2006年１月に独立したばかりである。このように，父親を対象とした子育て支援の取り組みは緒についたばかりといえる。これらのうち数箇所については，ヒアリング調査を試みた。その詳細は，稿を改めて報告する予定であるが，いずれも始めたばかりで手探り状態であると回答された。このような中で，ダッドガレージは2004年に活動を始めた個人の父親支援研究所であるが，数年の実績があり，「お父さんの子育てのテーマはキャリア教育である」という提言には説得力がある（山本，2005）。

ともあれ，父親に対してどのような支援が可能で，利用されやすいのかという点については蓄積された資料はまだなく，一助となるようここに報告したい。

２）野外活動について

わが国における野外活動は，戦後，青少年の健全育成，集団生活のための訓練を主な目

的として始まったが，半世紀を経た現在，その目的は高度経済成長に伴う日常生活の利便化や少子化により変化したと言える。もっとも大きな変化は，環境教育という視点の導入であろう。自然と直接触れ合う体験や，あるのが当たり前と思い込んでいた電気やガスのない野外活動の体験が，環境配慮行動に効果をもたらす（岡田ら，2007，降旗ら，2006）と報告されているがここでは触れない。もう１点は，「生きる力」についてである。かつては，集団生活のための対人関係能力の向上や，不便な環境の中でいかに工夫して快適な生活を作っていくかといったことに眼目がおかれたと思われるが，「生きる力」そのものが減退している現在では，「引きこもらず自分から人間関係を築く」とか，「自分で課題を見つけ，考え，実行する」といった基本的な能力の育成が野外活動の大きな目的となっていると思われる。その効果について，小山ら（2007）は，長期継続型デイキャンプに参加した児童の社会的スキルが有意に向上したと報告しているし，尼崎ら（2007）も児童を対象とした調査で，女児は社会的スキルや判断力などの心理社会的能力，男児は思いやりなどの徳育的能力を有意に向上させたと述べている。また，大学生を対象とした研究においても対人恐怖心の軽減に有効である（三原，2007）との報告がある。

厳密には野外活動とはいえないかもしれないが，筆者は，週末を自然豊かなログハウスで，共同で子育てした経験があり，川遊びや野外料理で父親たちが生き生きと活躍するのを見てきたし，子どもたちにとってかけがえのない体験になったことも報告した（市川，2004）。

このように，野外活動には子どもの「生きる力」を引き出すという大きな効果があり，子どもの変化を目の当たりにできるという点で，父親に子育ての魅力を体験してもらうのに適しているといえる。さらに，日ごろは，主に母親が中心となって子どもとかかわっていると推測されるが，野外活動の場合，日常からはなれることで，父親も気後れすることなく子どもとともに楽しむことができると考えられ，父親にも子育ての醍醐味を味わってもらうのに最適であると思われた。

３．アンケート調査の方法

１）対　象

市立Ａ小学校学童保育保護者会の保護者　　男性６名　女性６名

市立Ｂ小学校１～３年生児童の保護者　　男性42名　女性54名

合計　男性48名（29～61歳，平均年齢39歳）

女性60名（29～48歳，平均年齢37歳）

性別に記入のなかった１名はデータから省いた。Ｂ小学校は，キャンプチラシを児童を通じて配布していただいた学校のうちの１校である。

２）調査日時

2006年８月および10月

３）調査手続き

Ａ小学校の場合，学童保育キャンプ実施時にキャンプ場でアンケート用紙を配布，その

場で回収した。後述するが，同時にヒアリングも実施した。Ｂ小学校の場合，アンケート用紙は，学級担任より児童を通じて配布，後日回収した。

前述のキャンプチラシ（付録参照）を添付し，それを見て質問に答えてもらった。質問は，チラシのキャンプに参加したいと思うかどうか（女性の場合はパートナーに勧めようと思うかどうか），したい理由８項目，したくない理由７項目から当てはまるものすべてを選択してもらう形式で尋ねた。「その他」の欄も付け加え，自由に記述できるようにした。

また，父親の子どもに対するかかわり10項目について，どのくらい重要と思うか「かなり重要である」「多少重要である」「多少重要でない」「かなり重要でない」の４段階で答えてもらった。

４．アンケートの結果とその考察

１）キャンプ参加希望について

このキャンプに参加したいと思うか，またはパートナーに参加を勧めたいと思うかの回答を表１にまとめた。約９割が参加しようと思わない，または参加するようパートナーに勧めようとは思わないという答えで，このキャンプの計画に重大な問題点があることがわかった。

表１　参加希望の割合（％）

	男性(48人)	女性(60人)
参加したい(勧めたい)	10.4	10.0
参加したくない(勧めたくない)	87.5	90.0
不　　明	2.1	

２）キャンプ参加の条件

では，参加するためにはどのような条件が整えばよいのだろうか。ここが改善されれば参加するという条件を尋ねた結果をまとめたものが表２である。これを見ると，まず，男女とも半数が丸をつけていたのは，「１回だけなら」というところで，３回連続というのが参加しにくい最大の原因だったようである。「その他」に書かれた自由記述（表３参照）を見ても，たとえ数ヶ月先であっても父親が３回の日程を合わせることはきわめて困難であると述べられている。また，土日でも仕事が休みでないという記述も見られた。それと関連して，はじめからファミリーでという項目にも半数近くが丸をつけている。父親当人のみならず，母親も，父親のみの事前学習は必要ないと考えていることがわかった。毎年家族や仲間とキャンプをしており，これ以上参加したいとは思わないという記述もあった。さらに参加費であるが，父親の５割母親の４割が「参加費が安ければ」と答えている。１名6000円というのは実費にも足りないのであるが，家族４人で参加しようとすると，24000円となり，子育て中の家族にとっては大きな出費であろうし，お得感がないと思われたのではないだろうか。

申込者が少なかったことについて，当初若い世代は野外活動に関心がないのかと推測したが，日程と費用の問題が大きかったようである。

表２　参加の条件（％）

	男性(48人)	女性(60人)
１回だけのキャンプ	50.0	50.0
日帰りキャンプ	9.5	24.1
キャンプ以外のイベント	21.4	20.4
講　　演　　会	2.4	1.8
はじめから家族で	45.2	50.0
参加費を安く	52.4	39.0
魅力的なプログラム	19.0	3.7
そ　　の　　他	26.2	31.5

複数回答のため，合計は100％を超える

表３　改善点についての自由記述

男性	土日で休みがとれないから。
	プレキャンプは不要。
	仕事の休みがとれないから。
	キャンプ思い出会は不要。
	企画内容に魅力がない，広報のしかた。
	企画内容に魅力がない。
	内容的には面白いがプレッシャーが少し大きい感じがします。
	キャンプは家族で毎年数回行っている。
	子どもとよく遊ぶ様にしているから。
	電車に乗っていくのも嫌，駅から歩いて帰るのが嫌，テントで寝るのも嫌。
女性	時期が盆というのはつらい。
	お盆休みは，帰省と重なる。主人は土日は休みではない。
	日　　程。
	集合場所が遠くバスなどが近くからあればよかった。
	主人が土日休みではないので。
	３カ月にわたってはなれた日の予定をたてにくい。
	お父さんの仕事が休みがないので参加は無理です。
	我家は毎年キャンプに出かけているキャンパーです。家族だけや５～６家族での団体行動で，パン作り，川下り，釣りなど様々な企画をたてているので必要性を感じていない。
	内容があれやこれや多すぎる。何種類の中から選べると良い。反省会？思い出会はいらない。
	家族でキャンプは毎年何回か行っている。
	観光バスがいい。テントは各家族でたてて寝る。川遊び等を入れる。
	父親の仕事が土曜日休みではない。今年は７月末に母親が入院する予定があったから，日時を見て無理だったのでチラシをよく見なかった。
	３日連続は仕事がある人にはきつい。

３）参加したい，勧めたいと考える要因

参加したい，勧めたいと答えた人は先にも述べたようにごくわずか（父親５人母親６人）なので，パーセンテージで表示すると，１人がどう答えるかで値が20％も変わってしまうため表にはしないが，男女とも過半数が「家族で参加できる点」を参加したい（勧めたい）要因として選んでいる。小学生ともなれば，子どもだけを対象としたキャンプがあちこちで企画されているが，それらとは異なるニーズがあると考えられる。

４）これまでのキャンプ経験

これまでのキャンプ経験を尋ねた結果をまとめたものが表４である。父親の50％母親の70％がキャンプ経験３回以下ということで，このような企画は，子どもたちだけでなく父親母親にもキャンプの楽しさを味わってもらう機会を提供することができると思われる。

表４　キャンプ経験（％）

	男性(48人)	女性(60人)
初めて(０～１回)	37.5	35.0
２～３回	12.5	36.7
４～６回	18.8	10.0
７回以上	27.1	15.0
未 記 入	4.2	3.3

５）父親のかかわりの重要性

小学校低学年の子どもに対する父親のかかわりとして，どのような事柄が重要と考えるか「かなり重要でない」から「かなり重要である」まで４段階で評定してもらった。結果を表５に示す。すべての項目において男女間の有意差は認められず，父親の役割に関しては，男女とも同じような考え方をしていることがわかった。重要であると考えられている

表５　父親のかかわりとしての重要さ

	男性(48人)		女性(60人)		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
ほめる	3.8	0.43	3.7	0.45	1.27
しかる	3.7	0.52	3.7	0.49	-0.53
看病する	3.1	0.81	3.0	0.86	0.65
慰める	3.6	0.54	3.6	0.56	-0.17
一緒に遊ぶ	3.7	0.47	3.6	0.58	0.35
いじめられたとき助ける	3.2	0.86	3.2	0.83	0.37
一緒にお風呂に入る	3.0	0.82	3.0	0.76	-0.14
勉強を教える	3.1	0.62	3.0	0.69	0.92
人生や世の中について教える	3.5	0.62	3.4	0.65	0.87
野外活動，スポーツ，趣味を教える	3.3	0.64	3.4	0.56	-1.19

どの項目も５％レベルで有意差なし

のは，「しかる」「ほめる」のようなしつけや社会のルールを教えることと「一緒に遊ぶ」「慰める」のような情緒的かかわりであった。逆に比較的点数が低かったのは，「一緒にお風呂に入る」「看病する」「勉強を教える」のような日常の世話に関する項目であった。キャンプとかかわりが深いと考えられる「野外活動・スポーツ・趣味を教える」は，その中間であった。すなわち，キャンプにおいても，野外活動のノウハウを子どもに教えるというよりも子どもと一緒に遊ぶことを望んでいると推察できる。あらかじめ父親のみにキャンプ技術を覚えてもらい，それを子どもに教えるという企画は，ニーズから外れているといえよう。

6）自由記述について

たいていのアンケートでは，自由記述欄には何も記入されないことが多いが，多くの父親母親の記入があった。子育ての領域には関心が高いことが推測される。父親のかかわりとして重要なのは，「共通の趣味を楽しむ」「家族一緒の行事」「家族一緒の食事」「会話」という記述で，家族で共通の体験をすることが大切と考える人が多い。

5．ヒアリング調査の方法

1）対　象

市立Ｂ小学校学童保育のキャンプ引率保護者　男性６名（33～50歳，平均年齢40歳）
女性６名（32～41歳，平均年齢36歳）

2）調査期日

2006年８月

3）方　法

学童保育の夏季キャンプ実施時にキャンプ場において，休憩時間を利用して，男女別にグループで実施した。アンケート内容やキャンプについて半構造面接の形式で自由に語ってもらった。

6．ヒアリング調査の結果

＜父親グループ＞

当日金曜日であったので，まず，仕事についてたずねた。すると全員が，「休んできた」と答えた。「子どもが行きたいといったので仕事を休んだ」とのことであった。相当意識の高いグループなのかと思ったが，「学童という組織があるから参加した」「ほかの行事でも顔を合わせているので来やすかった」ということで，「もし個人なら来ていない，家でゆっくりしたい」のが本音の方もおられた。キャンプチラシについては，「３回の日程を合わせるのが難しい」「土曜は休めない人もいる」という日程の問題，「はじめから子どもも一緒のほうがいい」「パパだけのは勉強みたいでしんどそう」「知り合いがいない時は，父親単独は行きにくい」「いいところを見せるというよりは，子どもと楽しみたい」というように，父親単独キャンプの評判がよくなかった。「３回の流れがわかりにくい」というチラシの表現の問題，「昆虫採集のように目的がはっきりしているほうがよいかも」と

いった内容についても指摘があった。

＜母親グループ＞

金曜なのにお父さん方も熱心ですね，という問いかけに対し，「土日にしても父親の参加人数は変わらなかったので，指導員の先生の休みの関係で金土にした」という返答。参加しようと思う人は，仕事を休んででも来るし，参加したくない人は仕事が休みでも来ないということで，個人個人のモチベーションにかかわっている。キャンプチラシについては，父親同様，「３回の日程を合わすのが困難」「キャンプを習うところからやろうという人は少ないのではないか，好きな人はすでにやっていると思う」「自分のペースでやりたい人が多いのかも」「ＰＴＡとか町会とかの組織でなく，知り合いのいないところでは難しいかも」といった意見が述べられた。内容については「家族だけではできないこと，たとえば木の上に小屋を作るとか，竹に米をつめて炊くとかならやってみたい」「昆虫採集といっても珍しい昆虫を探すとか，目玉が必要」との意見が出され，なかなか要求水準が高いなあという印象であった。

７．ま　と　め

アンケート調査，ヒアリング調査両方の結果から，今回のキャンププログラムが申込者が少なくて中止に追い込まれた最大の要因は，３回の日程にすべて参加するという連続講座の形にあったといえよう。３回の日程の調整が困難であること，父親のみの参加に魅力がないこと，がわかった。また父親の意識は，子どもによいところを見せたいのではなく，ともに楽しむという点にあることも大きな発見であった。笠原（2007）によれば，ある野外活動に参加した父親は「平日は忙しくて子どもとかかわる時間はない，しかし（子どもは成長していくので）子どもとともに楽しめるときは今しかない，だからこそ，休日はできるだけ子どもとともに過ごすようにしている。」と述べた。これが平均的な父親の意識ではないだろうか。休日は休みたいという思いと，子どもとともに過ごしたいという思い，その妥協点が「ともに楽しむ」というスタンスであり，「子どものために学ぶ」には，父親は疲れすぎているのかもしれない。一方で，子どもが行きたいというから仕事を休んで参加する父親もおり，スウェーデンのように男性の７割以上が18：00までに帰宅する（内閣府，2005）ことは望めないにしても，せめて子育て期の間，希望に応じて仕事量を調節できるようなシステムが作れないものかと企業側の支援を期待する。

父親の役割についてどのような面が重要と思うか，男女の考え方に違いは認められなかった。しつけや社会のルールを教えることと，情緒的かかわりの項目で得点が高く，日常的な世話の項目で，得点が低かった。母親の役割についてはたずねていないが，日常的な世話の項目では高くなることが予想され，父親と母親の役割については，おそらくやや異なるものが期待されているのであろう。この点については，従来のステレオタイプがそのまま残っているのか，変化しつつあるのか調査する必要があるが，今後の検討課題としたい。

＜謝辞＞
お忙しい中，アンケート調査やヒアリング調査にご協力くださった，子育て中のお父様お母様に感謝いたします。また，アンケート用紙の配布や，仲介の労をお取りくださった，小学校の先生方とキャンプ場のスタッフの方々にもお礼申し上げます。ありがとうございました。

＜付記＞
このプログラムと研究は，2006年度大阪経済大学共同研究費（共同研究者：経済学部地域政策学科講師　森詩恵）の助成を受けて実施されたことを付記いたします。

＜参　考　文　献＞

尼崎加奈子ら（2007）自然体験と生きる力について――自然学校参加児童を対象に――関西野外活動ミーティング2007研究発表資料
市川緑（2004）父親も参加する週末共同子育ての試み――「子どもの村」の実践より　大阪経大論集　第55巻１号　p191～199
岡田成弘ら（2007）少年期の組織キャンプにおける Significant Life Experiences が成人後の環境行動に及ぼす影響　関西野外活動ミーティング2007研究発表資料
降旗信一ら（2006）Significant Life Experiences（SLE）調査の可能性と課題　環境教育　第15巻２号　p2～13
笠原大嗣（2007）父親の育児参加の現状　大阪経済大学2006年度卒業論文（未公刊）
小山諒ら（2007）デイキャンプで社会的スキルをより高めるには――キャンプにおける社会的スキルの獲得と日常への学習般化の関連――関西野外活動ミーティング2007研究発表資料
滝口俊子（1984）父子関係の成り立ち　馬場謙一ら編『父親の深層』p33～71　有斐閣
内閣府経済社会総合研究所（2005）『スウェーデンの家族生活――子育てと仕事の両立――』国立印刷局
新座子育てネットワーク（2005）Fatherhood it's the best job on the planet 日本語版
西岡八郎（2004）男性の家庭役割とジェンダーシステム――夫の家事育児行動を規定する要因『少子化のジェンダー分析』勁草書房
西薗昌久（1984）精神分析療法における父親――歴史と考察　精神療法第10巻２号　p109～119
蛭田由美（2001）父親の子育て支援に関する研究　母性衛生第 42巻２号　p386～393
ベネッセ次世代育成研究所（2006）『第１回乳幼児の父親についての調査報告書』
正高信夫（2002）『父親力――母子密着型子育てからの脱出』中公新書
三原基（2007）大学キャンプ実習が参加者の対人恐怖心に及ぼす影響　関西野外活動ミーティング2007研究発表資料
山極寿一（1997）『父という余分なもの――サルに探る文明の起源』新書館
山本秀行（2005）『ビジネスマンのための子育てガイド』英治出版

付録：キャンプ参加者募集用チラシ

パパが主役の ファミリーキャンプ

お父さん！　子どもとおしゃべりしていますか？　キャンプを通して絆を深めましょう！

対　　象：小１～小３のお子さんがいるご家族　（兄弟姉妹が未就学あるいは小４以上でも構いません。）
＊主にご参加頂くのは、お父さんと小１～小３のお子さんです。

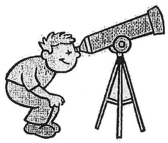
日　　程：全３回

[1回目]７月29日（土）～30日（日）**お父さんだけの「プレ・キャンプ」**
＊ファミリーキャンプに必要なアウトドアテクニックを、
ＮＯＳ（能勢アウトドアスクール）スタッフが指導します
（能勢電鉄「日生中央」駅に10時30分集合です）



[2回目]８月12日（土）～13日（日）**ご家族みなさんでの「ファミリーキャンプ」**
（予定プログラム）

１日目	２日目
午前９時　大阪経済大学に集合 野外活動センター到着 開会式 お昼ごはん パパと行く「昆虫探しハイキング」 パパが腕を振るった豪華料理が並ぶ 「キャンプナイトパーティー」 パパが進行する「キャンプファイヤー」 星空観察 ･･･夜はテントで大自然を感じながら寝ます･･･	朝の散策 ダッチオーブンでの朝食パン作り ご家族対抗！「オリエンテーリング」 お昼ごはん 家族で作る「思い出クラフト」 閉会式 野外活動センター出発 大阪経済大学にて解散





[3回目]９月３日（日）10時～12時半　**ご家族みなさんでの「キャンプ思い出会」**

会　　場：大阪府立総合青少年野外活動センター（豊能郡能勢町宿野437）
＊9/3（日）は、大阪経済大学にて（阪急電鉄「上新庄」駅より徒歩１５分）



参 加 費：全３回のお父さんとお子さん１人分　20,000円
（キャンプ２回分の宿泊料・食事代・おやつ代・傷害保険料等も含みます）
＊お子さんお１人追加ごとに6,000円必要となります。

申込方法：①氏名（参加する方全員）②ふりがな、③住所、④電話（緊急連絡先）⑤年齢をご記入の上、はがき・FAX・メールで下記（担当：森）宛にお申込み下さい。

申込締切：７月15日（土）到着分・消印有効

そ の 他：このキャンプは2006年度大阪経済大学共同研究助成を受け、「パパのための子育て講座」として実施されます。

主　催：ペンギン子育てクラブ　（大阪経済大学 人間科学部　市川 緑・ 経済学部　森 詩恵）
〒533-8533　大阪市東淀川区大隅2-2-8　　E-Mail:XXXXXXXX
TEL：XXXXXXXX　　FAX：XXXXXXXX

後援：大阪府教育委員会・大阪市教育委員会　　**運営協力**：財団法人 大阪府青少年活動財団